

戦時公衆衛生

「十五年戦争」と公衆衛生(その1) 助 昭二(金沢市・内科)

「十五年戦争」と子どもたちの身長、体重

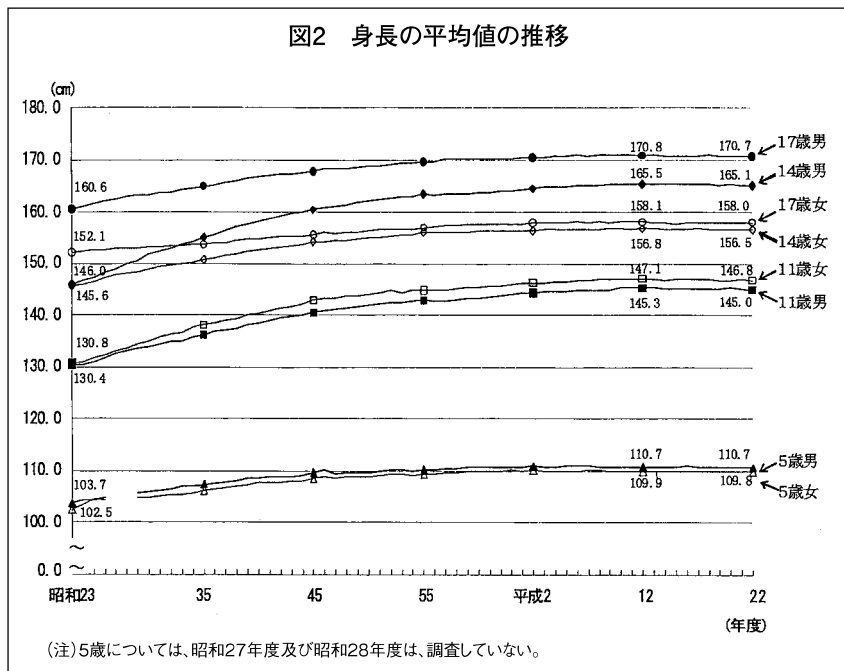
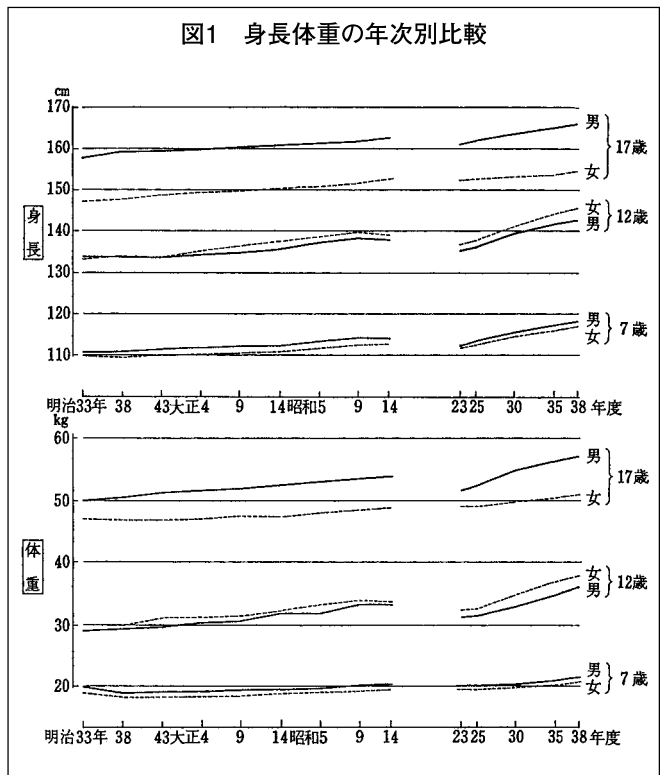
*日本の「子どもたち」、明治以来今日まで身長・体重が毎年伸び続ける

現在、多くの日本人は、息子は自分より「身長」が高く、孫はその息子よりも背が伸びていることを実感しているはずである。図1^①は明治三十三年(一九〇〇年)からの子どもたちの身長・体重(平均値)の年齢別年次推移であり、図2^②は平成二十二年までのそれを示している。つまり日本人は明治の文明開化以来、今日まで身長・体重が伸び続けてきたのである。私たちの今の実感をこれらの統計表は裏付けている。

*中断した折れ線グラフ
ところが、明治時代から今日までのこれらのどのグラフを見ても、奇異なことに気が

づく。それは一九四〇年(昭和十五年)から一九四七年(昭和二十二年)の期間は、この折れ線グラフが中断していることである。その理由を調べると、一九四一年から学童の「体格」は国防上の秘密事項となり、各県、政府は公表しなかったため、今日でもそれが不明のままであること、また敗戦後の二年間はそのような統計数字は把握するような状態ではなかったこと、そのため折れ線グラフがこの年代七年間ほどが中断とならざるを得ないというのである。

さらにもう一つ奇異なことに気づく。それは、この中断した折れ線グラフから全体として子どもたちの身長体重は明治以来一貫して年々伸びていて向上きであるに

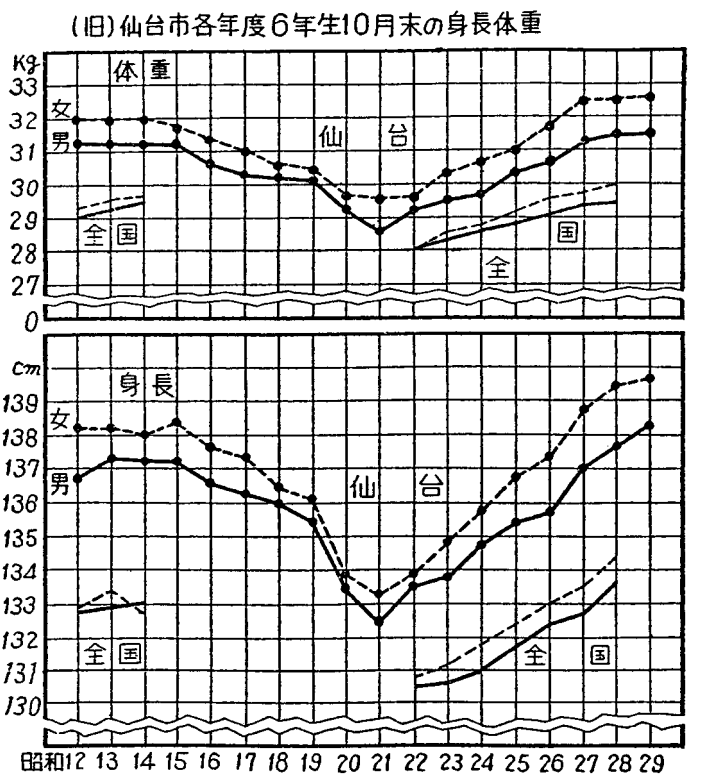


もかわならず、昭和二十三年(一九四八年)のそれは、七年前の昭和十四年のそれより下がっていることに気付くのである。この期間には身長・体重が伸びないどころか、短縮したのか?である。

*この不明部分がどうなっているのだろうか?

ところがこの不明な折れ線グラフの、この部分を推定できる資料が仙台市で見つかった。それが図3^③である。これを見ると驚くことが判明する。一九四一年(昭和十六)から一九四六年までは仙台市の学童(六年生)の身長体重は、なんと徐々に「低下」していったのである。昭和十五年では六年生男子の平均身長が百三十七・二センチであるが、その六年後の昭和二十一年では百三十二・五センチとなっている。約四・七センチも身長が低くなる。体重も二・五キロも減少しているのである。明治の近代化で始まった日本人の体格の年々の向上が今日まで続いているが、この期間約七年間、十五年戦争の末期の期間だけストップ、いや逆に体位が低下していたのである。

図3 仙台市学童発育最近の動向並びに学校給食の効果 (昭和30年末、東北大学近藤教授による)



仙台市は10月末の測定であり、全国平均は4月の測定であるから、仙台市と全国平均との差は、これより半年程せばまることになる。『栄養改善とその運動』(厚生省公衆衛生局編・第一出版)

*この逆行の原因はなにか?

まず考えられるのは、当時の食料事情であらう。

「ある日、部屋にもどると一人の子が掌に何かをのせてなめていた。班長が帰ってきてその子が何を食べていたかを尋ねたが返事がない。先生に報告すると言うと掌を広げて見せた。ごま塩じゃないか。ゴマ塩は学童疎開で持参してよい唯一の食料品であった。これは学童疎開を経験したある主婦の手記の一節^④である。当時の貧困な日本人の「耐乏生活」が窺われる。

無謀な「戦争」のため、逼迫した国民生活に追い討ちをかけた食料配給制度が始まったのは一九四一年(昭和十六)四月からである。普通成人一人一日、米二合三勺からである。その後、はやくもこの年の七月には芋、麦などの代用食も含めた「総合配給制」となり、一九四五年には遂に二合一勺と減量され、それもやがて「遅配」となっていたのである。

食糧問題は、日常的には一見気付かないが、いつの時代にも、またどの民族、国民にとっても、ベーシックな保健問題であり、すぐれて「政治問題」なのである。

【引用文献】

- (1)文部省「学校保健統計調査報告書」昭和38年度版、12頁
- (2)文部科学省「学校保健統計調査報告書」平成22年度版、7頁
- (3)厚生省公衆衛生局編「栄養改善とその運動」第一出版
- (4)暮らしの手帳編集部編「戦争中の暮らしの記録」、112頁、暮らしの手帳社
- (5)助昭三著「戦争と医療」、64頁、かもがわ出版

*広範な青少年の成育に影響が

筆者は一九二二年(大正十)から一九四八年(昭和二十三)までに生まれた人の平均身長と体重が各年齢のそれまでのピーク時より低下しているかどうかをチェッ